

学籍番号: NE22-1027C

氏名: 勝又彩華

---

## 緑豊かな生田緑地でのまなび

### 1. 生田緑地とは

私は今回、フィールドワークとして生田緑地を訪れた。生田緑地は、昭和16(1941)年に都市計画決定された都市計画緑地であり、首都圏を代表する自然環境を有している<sup>[1]</sup>。

生田緑地内には、川崎市立日本民家園、かわさき宙と緑の科学館、伝統工芸館、川崎市岡本太郎美術館、生田緑地ばら苑、川崎市藤子・F・不二雄ミュージアムなどのさまざまな施設がある。今回はフィールドワークとして緑地内とかわさき宙と緑の科学館の探索をした。

### 2. かわさき宙と緑の科学館

#### 2-1. 科学館内の設備

まず最初にかわさき宙と緑の科学館を訪れた。この科学館は生田緑地東口から入ってまっすぐ進んだところにある科学館である。この科学館は3階建てになっており、1階は展示室やプラネタリウムがあり、2階は実験室・学習室や自然観察テラスがあり、3階には天体観測スペースがあった。

1階の展示では、川崎の自然について5つのコーナーに分けて紹介されていた。大地、丘陵、街の自然、多摩川の自然、生田緑地ギャラリーの5つの展示コーナーがあった。

2階の展示では、太陽系から宇宙までを解説した天文展示があった。さらに学習室や実験室があり、実験室では楽しそうな実験が行われていた。

#### 2-2. 展示を見学して

まず、展示全体を見て気がついたのは視覚だけでなく聴覚や触覚でも楽しめる展示が多いことである。展示物には、地層の展示や標本、化石の展示など視覚で楽しめるものがたくさんあった。



図1 化石の展示



図2 地層の展示

しかし、それだけでなく触って聞いて楽しむものも多かった。図3は木の説明に加えて、実際の木の一部分を展示することで、触って色や感触の違いを知ることができた。



図3 木の標本

また、図4、5のように自分で扉を開けたり、引き出しを使った展示も多かった。ただ見るだけでなく、触覚を用いることで、学ぶ意欲が掻き立てられ楽しく学べると感じた。さらに、虫の鳴き声を聞くことができるコーナーもあり、触覚や聴覚で楽しめる仕掛けがたくさんあることに気がついた。



図4 自分で開閉できる扉



図5 自分で開けられる引き出しの展示

また、展示の仕方にも工夫が見られた。1階の展示を見ている気がついたのは高さのある展示や床にある展示の多さである。展示を見ている鳥の標本がかなり高いところに置いてあることに気がついた。また、床に着目すると地中で生きている生物や植物の展示がされていた。鳥の標本を木と同じくらいの高いところに置いたり、地中の生物や植物を床に展示することで、見ている人に自然の中にいるかのように感じさせているのかと考えた。



図6 高さのある展示と床の展示

かわさき宙と緑の科学館では展示以外にも、生田緑地観察会や実験工房、自然ワークショップなどさまざまなイベントが定期的に行われていることがわかった。このイベント情報を見ても実験教室やワークショップなど、実際に体験してみる活動が多いと感じた。

### 2-3. 訪れた人の様子

私は平日の昼間に訪れたが、家族連れで賑わっていた。子供たちがどのように展示を楽しんでいるか観察してみると、やはり自分で触れたり音を聞いたりすることができる展示に集まっていた。子供は好奇心旺盛であるので、何か見るというよりは触れたり聞いたり、自分自身で何か体験できる展示の方に興味を引かれるのだと考えた。

私たちが住んでいる場所の地層や自然など、あまり学ぶ機会が多くないのでこの施設で得る情報は新しく興味深いものばかりであった。歴史や流れを理解しながら川崎について勉強することができるので、大人でもかなり見応えのある展示で多くの人が見入っていた。

実際に訪れた科学館に来るのは3回目だという親子連れに話を聞いてみたところ、自然豊かで涼しいので子供のお気に入りだそう。子供に話を聞くと、この展示を見てから昆虫に興味を持つようになったそうで良い影響が見られた。親子のおすすめはプラネタリウムだそうで私が行った時間は投影時間でなかったため見ることはできなかったが、ドームスクリーンで投影するためリアリティがあり、かなり見応えのあるプラネタリウムだと分かった。

### 3. 緑地内を散策

実は私は生田緑地を訪れたのが今回が初めてだった。「生田緑地」というくらいなので自然豊かなんだろうとは思っていたが、想像以上に緑が多くて驚いた。

緑地を探索していて印象に残っているのが、虫取りをしている子である。上記の科学館で展示されている昆虫や虫がたくさんいるため、広場で虫取りをしている子供が多かった。私はこの風景を見て子供にとって非常に良い環境だと実感した。今の時代、ゲーム機の普及や新型コロナウイルスの影響もあり、子供が自然に触れる機会が減っていると感じる。幼児期から草花や小さな生き物に触れるという自然体験は本来人間がもっている五感(官)を刺激し、好奇心をはぐくみ、感動を知り、豊かな感受性の発達をうながす基本的な要素<sup>[2]</sup>であるとされている。多種多様な生き物や植物と触れ合うことができる機会を作る生田緑地の存在は子供たちの成長に欠かせないものなのではないかと考えた。



図7 小川で虫取りをする親子

#### 4. まとめと考察

今回生田緑地のフィールドワークをして、かわさき宙と緑の科学館の工夫や訪れた人の様子を記した。また、緑地内を探索して訪れた人がどのようにして楽しんでいるのか記した。実際にフィールドワークをしてみてその自然の多さと土地について学べる素晴らしい環境に驚いた。自然を学ぶには打って付けの場所であるため、コロナも収束して外に出られるようになった今だからこそ訪れるべき場所だと感じた。

今回見ることのできなかつたプラネタリウムや訪れなかつた美術館や伝統工芸館にも足を運びたい。

#### 参考文献

[1] 生田緑地公式ホームページ 生田緑地について

<https://www.ikutaryokuti.jp/ryokuchi.html>

(2023年8月23日閲覧)

[2] 日本自然保護協会【子育てと自然】第1回:子どもに自然とふれあわせるのはなぜ良いのでしょうか?(2020)

<https://www.nacsj.or.jp/2020/07/20815/>

(2023年8月23日閲覧)